

『ゴージャスお宝鑑定家』
「うくん、ゴージャス！」第
9話

第一幕：ゴージャスな朝の幕開け

（舞台は剛田質店の豪華な店内。クラシック音楽が流れる中、剛田が優雅に朝の準備をしている。彼の背後で、白金が真面目に掃除をしている。）

剛田：（ティーカップを手に取り、紅茶を注ぎながら）

「白金くん、今日の紅茶は特別だよ。『ダージリンの黄金葉』と呼ばれる、最高級の茶葉だ。」

白金：（モップを持ちながら）

「いやいや、剛田さん。それ、普通のスーパーで売ってるやつですよね？」

剛田…（優雅にカップを回しながら）

「ふむ、白金くん。紅茶というものはね、価格ではなく心で味わうものだ。」

白金…「心で味わうのはいいですけど、現実見てくださいよ。朝からそんなことしてたらお客さん来ても対応できませんよ。」

剛田…（紅茶の香りを嗅ぎながら）

「お客さまとは、ただ来るものではない。運命に導かれて現れるものだ。つまり、我々は待つだけでいい。」

白金…「それ、ただの怠けですよね？」

剛田…（優雅にカップを置き、背筋を伸ばして）

「いいかい、白金くん。我々は『ゴージャスの守護者』だ。この店にふさわしいお宝がやって来る時、それは宇宙が選び抜いた瞬間なのだ

よ。」

白金…（ぼそっと）

「……宇宙が選んだ結果、先月赤字だったんですけど。」

剛田…（微笑みながら）

「ふむ、ゴージャスな男は細かいことに囚われないものさ。」

白金…「いやいや、剛田さんの場合、細かいことに囚われなさすぎて問題なんですよ！」

（ここ）で店のドアが開く音がする。中年の男性客が豪華な金色のケースを抱えて入店。）

第二幕…純金トランプとの出会い

男性客…（大きな金色のケースをそっとカウンターに置く）

「あの……ここって鑑定とか買取とかやってくれるお店ですよね？」

剛田…（男性客を見るなり優雅に微笑み）

「ようこそ、剛田質店へ。我々が扱うのは、ただの品物ではない……魂が宿る『ゴージャスなお宝』のみだ。」

白金…（すかさずフォロー）

「簡単に言うと、はい、鑑定します！品物を見せてください。」

男性客…（金色のケースを開け、中を見せる）

「これなんですけど……。」

（ケースの中には、純金でできたトランプカードがきらめいている。）

剛田…（一瞬動きを止め、目を輝かせる）

「……ほほう……これは……！」

白金…（ケースを覗き込み、目を丸くして）

「えっ、本当にこれ全部金でできてるんですか？ただのメッキじゃなくて？」

男性客…(胸を張って)

「もちろん純金です。一枚一枚、ヨーロッパの職人が手作りした特注品です。」

剛田…(カードをそっと手に取り、表面を眺めながら)

「この輝き…この重み…！うーん、ゴージャス！！！」

白金…(耳をふさぎながら)

「いきなり大声出さないでください！びっくりするから！」

剛田…(男性客に向き直り)

「これは素晴らしいお宝だ。だが、このカードが真にゴージャスかどうかは、使ってみなければわからない。」

男性客…「使う？え、どういうことですか？」

剛田…(堂々と宣言)

「鑑定とは、ただ見るだけでは足りない！ 実際には、その価値を感じるのだ！」

白金…「いや、普通に鑑定すればいいじゃないですか！」

剛田…(微笑みながら)

「白金くん、君はまだ若い。このカードが生む『ゴージャスな時間』を、体感しなければならぬのだよ。」

男性客…「つまり……遊ぶってことですか？」

剛田…「違う！ 遊戯ではない。これは、芸術の検証だ！」

白金…「いや、普通に遊びたいだけですよね。」

(剛田が優雅にテーブルを用意し、トランプをシャッフルし始める。)

第三幕…ゴージャスなトランプタイム

ム

(剛田がテーブルの上に純金トランプを並べ始める。カードの輝きが部屋中を照らし、男性客は緊張した表情を浮かべる。)

剛田…(カードを一枚一枚ゆっくり並べながら)

「見たまえ、この光沢。この重厚感。そしてこの圧倒的な存在感……。トランプでありながら、もはやこれは芸術だ。」

白金…(腕を組みながら)

「まあ、確かにキラキラしてて綺麗ですけど……。普通に遊ぶには使いにくそうですね。」

男性客…「そうなんですよ！実は重たくて、普通のカードゲームには向かないんですけどね……。」

剛田…（男性客を一瞥し）

「普通のカードゲーム？そんなものは無意味だ。この純金トランプで遊ぶならば、それも

『ゴージャス』でなければならぬ。」

白金…「なんですか、その基準……。」

剛田…（トランプを手に取り、優雅にシャッフルしようとするが、金の重さに苦戦してカードが数枚床に落ちる）

「むっ……！！この重み……！！これこそが本物の証だ！」

白金…（床に落ちたカードを拾いながら）

「いやいや、それただ扱いにくいだけでしょ！ほら、また落ちてますよ！」

剛田…（拾ったカードをゆっくりテーブルに置きながら）

「ゴージャスな品物は、容易には人に従わないものさ。」

白金：「いや、何その謎理論……。カードが従うとか従わないとか関係ないでしょ！」

男性客：（少し心配そうに）

「あの……。本当に遊べるんでしょうか？」

剛田：（堂々と）

「もちろんだとも！ さあ、白金くん、男性客さん。ゲームを始めよう。」

（剛田がカードを配り始めるが、配る動作が非常にゆっくりで、しかもカードが滑らないため不格好になる。）

白金：（呆れ顔で）

「剛田さん、ちょっと！ カード配るだけでそんなに時間かかる人初めて見ましたよ！」

剛田：（笑顔で）

「優雅さとは、スピードとは無縁だ。焦らず、悠然と——」

（最後の一枚を配ろうとするが手元から滑り落ち、男性客の膝に直撃する。）

男性客：「い、痛っ！これ結構痛いんですけど！」「

白金：「だから言ったじゃないですか！普通のカードと違って重いんですよ！」

剛田：（軽く咳払いをして）
「ふむ。少しばかり力加減を調整する必要があるようだ。さて、ゲームを始めるぞ！」

（剛田がゲームを進めるが、勝負の途中で突然、ルールを説明し始める。）

剛田：「このカードを引いた場合、特別なルールが発動する。名付けて、『ゴールデンプル』！」

白金：「初耳ですけど！？今そんな決めましたよね！？」

剛田…(微笑みながら)

「ゴージャスなゲームには、即興のひらめきが
必要不可欠だ。」

男性客…「いやいや、そんなルールがあるなら
最初に教えてくださいよ！」

剛田…(カードを引きながら)

「これは芸術だ。ルールに縛られていては、その
真髓を味わえない。」

白金…「もはやただの我流ですよ！」

(剛田が悠然とカードを眺めている間、

白金と男性客はカードを見比べながら

作戦会議をしている。)

白金…(ひそひそ声で男性客に)

「剛田さん、ルールを勝手に変えてきますから
ね。こっちも何か手を考えないと！」

男性客：（困った顔で）

「でも、どうしたら……。これ、全部重たくてカード交換とか難しいんですよ。」

白金：（真剣な顔でカードを握りしめる）

「こうなったら、心理戦でいきましょう。剛田さんの『優雅』に隙を作るしかありません！」

男性客：「えっ、具体的には？」

白金：「僕が少しずつ突っ込むので、その間に手札を整理してください！」

（剛田は気づかないふりをしつつ、自分の手札を誇らしげに見せる。）

剛田：（優雅にカードを並べながら）

「ふむ、見たまえ。この手札の輝き……。これぞ勝利の予感だ。」

白金：（あきれたように）

「剛田さん、トランプの強さと輝きは関係ないですよ！」

剛田…（微笑んで）

「関係あるとも。ゴージャスな輝きが運を引き寄せるのだ。」

男性客…（カードを整理しつつ）

「それ、完全に気の持ちようじゃないですか？」

剛田…（カードを引きながら）

「ふむ。では証明しよう。この一手で勝負を決めてみせる！」

（剛田がカードをテーブルに出す。しかし、重たさで滑り落ち、派手に音を立てる。）

白金…（爆笑しながら）

「ちよっと待ってください！音でびっくりするトランプなんて聞いたことありませんよ！」

剛田…（軽いため息をついてカードを拾いながら）

「驚きこそがゴージャスだ。」

白金：「いや、ただ失敗してるだけですか
ら！」

（ここで白金が手札を全て出し、剛田に勝利
を宣言する。）

白金：（自信満々で）

「ほら、これで僕の勝ちですよ！優雅さじゃな
くて、実力で！」

剛田：（目を細めながらカードを見つめ）

「ふむ……。確かに君の勝ちだ。」

白金：（驚いて）

「えっ、普通に認めるんですか？」

剛田：（ゆっくり立ち上がり、男性客を見て
微笑む）

「だが、忘れてはいけない。勝敗など一時的な
ものにすぎない。このトランプの本当の価値
は、我々に何をもたらしたかだ。」

男性客…（戸惑って）

「えっと……何をもちたんですか？」

剛田…（胸を張りながら）

「それは……優雅なひとときだ。」

白金…（がくつと崩れ落ちながら）

「いや、それ剛田さんだけですよね！僕たちは
必死でしたけど！」

剛田…（笑顔でテーブルを片付け始め）

「さて、このゴージャスな時間を糧に、次は鑑
定だ！」

男性客…（慌てて）

「やっと鑑定してくれるんですね！」

（場面転換。剛田が鑑定道具を用意し始め、
白金は疲れ切った表情で椅子に座る。）

第四幕…鑑定の結論

(剛田が真剣な表情でトランプカードを一枚ずつチェックしている。一方、白金と男性客が椅子に座り、小声で会話をしている。)

男性客：「本当にこの人、ちゃんと鑑定できるんですかね？」

白金：「一応、ああ見えて実績はあるんです。クセが強すぎて疲れるんですけど。」

剛田：(ピンセットでカードを持ち上げながら)

「ほほう……この細工は見事だ。純金の層が均一で、エッジも滑らかだ。」

白金：「それっぽいこと言ってるけど、結局『ゴージャス』とか言い出すに決まっていますよ。」

剛田：(突然顔を上げて)

「うーん、ゴージャス！」

白金&男性客：(声をそろえて)

「ほら言った！」

（剛田はトランプのケースを閉じ、男性客に向き直る。）

剛田：「結論だ。この純金トランプ、我が質店の基準に照らしても申し分ない。ぜひ買取らせていただくよう。」

男性客：「本当ですか！？ありがとうございます！
ます！」

白金：（驚いて）
「えっ、本当に！？剛田さん、珍しくスムーズですね！」

剛田：「ふむ。ゴージャスなものは、時として迷いを必要としないのだ。」

白金：「いやいや、いつもは迷いまくってますけどね！」

剛田：（笑顔で）
「では、買取価格を提示しよう。……『100万円』だ。」

男性客：「えっ、本当にそんなに出してくれるんですか!？」

剛田：「もちろんだとも。だが条件がある。」

男性客：「条件……?」

剛田：「このトランプを、時折この店で使わせてもらいたい。」

白金：「結局また遊びたいだけですよね!」

第五幕：新たなお宝の予感

(純金トランプの買取が終わり、剛田は満足げに棚にトランプを収めている。白金は領収書を発行しながら、少し不満げな様子。)

白金：「剛田さん、毎回思うんですけど、買取基準がブレブレですよね。」

剛田：「何を言う。ゴージャスな品物には、ゴージャスな直感で応じるべきなのだ。」

白金：「いやいや、基準が『直感』だと信用失
いますよ！普通はもっと理論的に——」

剛田：（白金の肩に手を置いて）

「白金くん、大切なのは理論ではなく、心の
高鳴りだ。」

白金：「それ、買取のときに言っちゃいけない
言葉ですよ——」

（男性客が書類を受け取り、笑顔で帰ってい
く。）

男性客：「本当にありがとうございました！
また何かあったら持ってきますね！」

剛田：（手を振りながら）

「いつでもどうぞ。我が質店は、常にゴージャ
スなお宝を歓迎する。」

白金：（ため息をつきながら）

「次はもう少し普通の品物がいいな……。」「